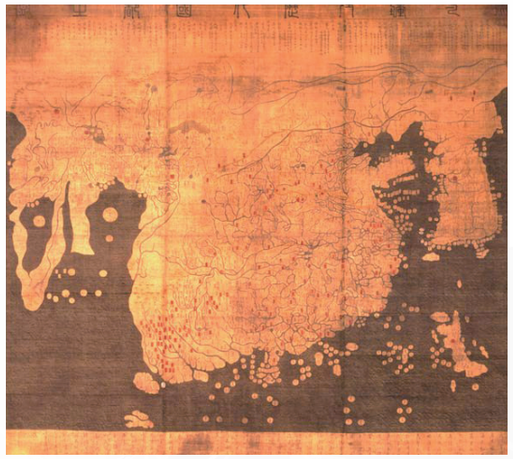
残された史料から何を読み取るか：文献史学の愉しみ

研究最前線

THE FRONT LINE of RESEARCH

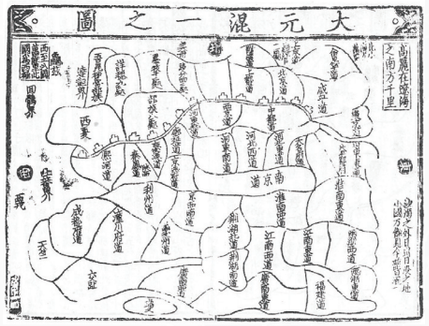
今からさかのぼること700年前、ユーラシア大陸には、大モンゴル国という大帝国が存在しました。モンゴル高原で遊牧生活を営んでいた集団が徐々に勢力を拡大し、東は朝鮮半島から西はポーランドやルーマニア、南はパキスタンまでを支配していました。この時代の地図として近年注目されるのが「混一疆理歴代国都之図」です。15世紀初頭の朝鮮でつくられたこの地図は、「大元」（＝大モンゴル国）治下の中国でつくられた地図を下敷きとし、世界各地で歴代王朝の「国都」となった都市が赤字や丸囲み等で強調されています。地域も時代も超越した情報がつまった地図でした。カスピ海や黒海も見えるし、中東やヨーロッパの都市のいくつかもほぼ正しい位置にドットされています。この地図からは、当時の中国や朝鮮にかなり確かな地理情報が伝わっていたことや、世界がどう認識されていたのかが垣間見えます。14世紀当時の中国では、アフリカ大陸の南の海がすでに知られていたとわかり、ヨーロッパの進出で初めて世界がひとつにつながったという常識を覆すに足る史料だといえます。

一方、同じ混一を冠する「大元混一之図」という地図が、大モンゴル国の百科全書に収録されています。この地図はもともと「華夷一統図」という名前で、西は「回鶻（ウイグル）界」「吐蕃界」、南は「交趾」までのユーラシア東部が長城を南北に挟む構図で描かれています。中華の徳に染まらない地域を「夷」と分類した華夷思想によって考えると、「華」と「夷」がひとつとなった＝「一統」したと当時見られたことによる命名だったのでしょう。長城の北側や西域・天竺は「夷」ということになりますが、同じく「夷」の範疇とされる地域から出たモンゴル朝廷に配慮したのか、「華夷一統図」はやがて「大元混一之図」に改名され、内容も若干の改変が加えられたのでした。ただ、よく見ると、書かれた地名の多くは前代の行政区画のままで、現実には存在しない概念地図だったといえます。



『混一疆理歴代国都之図』（龍谷大学所蔵）

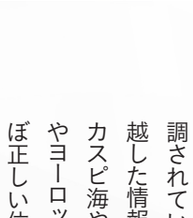
さて、これら2枚の地図は、ともに「混一」と名付けられたほぼ同時代の地図なのに、収録の範囲も違えば、その正確さもまったく異なっていました。なぜなのでしょうか。私の仕事とする歴史研究は、その背景にあったさまざまな情況を探っていくことに他なりません。それぞれの地図がいつどこで製作されたのかを考えるのはいうまでもないことで、どのくらいのサイズで描かれ、どんな風に現在にまで伝わったのかにも注意を払います。作成に関わった人物を特定し、その人物の履歴や立場を明らかにし、そこから地図作成の目的や意図を推測します。地図の作者がどんな政治環境のもと、どんな経済状況の家に生まれ、どんな学問を修得しつつ成長し、どんな仕事で食い扶持を得ていたのか……。この2枚の地図が表現しようとしているのは700年も前のことです。しかし、多くの文献史料中から断片的な記事を拾い集め、地図が作成された街を自身でも訪れ、地図それ自体を仔細に比較検討することによって、まったく異なる地図が作成された経緯が、現在の我々の前にも蓦然性を持って浮かびあがるのです。



『大元混一之図』（陳元靚『事林広記』中華書局より）

前者「混一疆理歴代国都之図」に見られる中東やヨーロッパについての知識は、ムスリムを中心とする海上交易の従事者やその周辺で蓄積された情報のたまものでした。中国の港町・泉州（福建省）を訪れると、当時泉州に住んで貿易に従事していた人々の墓を多く見ることができます。彼らは異境の地でどのような暮らしをしていたのか。現在と違い人づてに故国の情報を知るしかなかった人々の生活や思いを史料から再現するには、豊かな想像力と人の思いに対する鋭い洞察力が必要です。歴史は、温故知新にのみ援用できるものでなく、今を生きる私たちの心を豊かにしてくれるものでもあるというのが私の信念です。

14世紀泉州に暮らしたムスリムやネストリウス派キリスト教徒の墓石（泉州海外交通史博物館所蔵）



PROFILE

櫻井 智美
Satomi Sakurai

文学部准教授
専門：アジア史

1971年　熊本県生まれ
1994年　京都大学文学部卒業
1999年　同大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学　博士（文学）
2004年　明治大学文学部専任講師
2009年より現職

主な著書・論文
「『皇元大科三場文選』「策」校注」（『明大アジア史論集』21・共著・2017年）
「元代の南海廟祭祀」（『駿台史学』162・2018年）

所属学会
駿台史学会、東洋史研究会、東方学会